彙報

京都帝國大學講演會

京都帝國大學講演會は本月一日より同大學に於て第八回講演會を開く、講演課目及講師左の如し。

○經濟通論　法科大學教授　法學博士　田島錦治
○商法大意　法科大學教授　法學士　竹田省
○生理學
　內容　生理學ノ基礎トナルヘキ一般ノ事項ノ大意及一般ニ誤解シ易キ諸點ニ就テ
　醫科大學教授　醫學博士　石川日出鶴丸
○博物學通論及淡水生物學　實習　自午後一時至三時
　內容　博物學諸部ノ關聯、進化遺傳學ト社會。淡水生物ノ種類、生態、研究法、其水質調査並ニ初中等教育に於ケル應用
　醫科大學講師　理學士　川村多實二
○電氣化學及其應用
　工科大學教授　工學博士　中澤良夫
○河川ノ測定　工科大學助教授　工學士　平野正雄
○言語比較研究法
（殊ニ國語ト他ノ言語トノ關係）
　文科大學教授　文學博士　新村出
○宋明哲學綱領　文科大學教授　文學博士　高瀨武次郎
○本邦古代史管見　文科大學講師　文學博士　喜田貞吉
○射影幾何學概念　理科大學助教授　理學士　和田健雄
○電子ノ話　理科大學教授　理學博士　水野敏之丞
○光化學　理科大學助教授　理學士　堀場信吉

新著紹介

出家とその弟子

倉田百三著

渦巻く風の奥に潜む深い靜寂の姿を明に見窮める事の難いにも增して、苦腦や矛盾や數々の惡運に充ちた人生の底に隱れ潛み、人生を押し流して行くかの大沈默者の心を誤なく捉へることは更に難事である。或る哲學者はこの大沈默者は盲目的の意志だと主張し、ある思想家は之を永遠なる調和の力だと考へた。そして兎角人はこの相反した二つの主張のいづれかにのみ執着しやうとする。又この二つの考を深刻に調和し得た人も未だ私は聞かない。しかしそのいづれかの一方にのみ執せんとするや否や、その考の中には完全に攝取せられ得ざる事實もしくは要求が直に動かし難き眼前の事象として反抗して來る。かくて時代と言ふ大河は樂天觀と厭世觀との二つの波を交々に起して無限のかなたへと流れて行くのである。今世紀に入つてより時代は著しく樂天的な呼吸をし始めて來た。そして一と度自然主義の洗禮を受けた現代の樂天

觀は人生に於ける如實の矛盾や苦痛惡運を無視しないことに於ては固より古のそれとは比すべくもないが、殊に日本の青年中にはややもすればその矛盾苦腦はどこまでも見ることは見るにしてもその矛盾苦腦と永遠の調和力との內面的な必然の關係を明かにせず、なべての運命をあまりに難なく直に惠深き攝理の力によるものとして片づけてしまひたがる人も少くない。これは恐らく（自然主義は固より藝術上に於ける正しい立場ではないが、それは今別として）日本の文壇が自然主義を受け入れるべき時代に深刻にこれを受け入れることなく上滑りをして通つてしまつたと言ふ當然の結果であらう。その意味に於てはもう一度今度は深刻な自然主義的傾向が日本の文壇に生れて來はすまいかと私は空想してゐる一人である。が、それは今姑く措く。——

偖、こゝに紹介せんとする倉田氏の戲曲「出家とその弟子」は序詞と六幕とより成り第一の幕に於ては今は獵夫となつて雪と風との北國に住みなやむ左衞門と言ふ浪人が、その主君に見棄てられてより以來憂き艱難の數々を經た結果の惡辣な人生に於て乞食にもならずに生きてゆかうとすれば、慈悲憐憫と言ふやうなものは一切捨て鬼の樣な心になつて行くより外仕樣がないと言ふ人生觀を得てどこ迄も惡い酷い性格にならうと努力するが、本來の優しい性格に妨げられて充分に惡人とは成り切れぬが爲めに苦しみ悶え、にがい自棄酒をあほつて世と人とを嘲笑し罵つてゐる所へ、自をこの世に於ける無智文盲の極重惡人と痛感してすべての人を裁かず呪はず一切を慈悲の彌陀に任せ切つてゐる親鸞上人とその弟子とが雪降る中の行脚に歩み疲れて一夜の宿を乞ふて來るのを、優しい妻の止めるのをも聞かずに殘酷にも一旦は罵詈打擲して逐ひ出しはしたものゝ、夜中に見たふとした夢の事から一時に心內に潛んでゐた優しい善心が力强く目覺めて來て懺愧の念にえ堪へずなり、その時門前に石を枕として冷たい夢路を結んでゐた上人を招じ入れて直に佛門に歸依する經路を描寫してある。そしてその時それを傍で見てゐた左衞門の子の松若と云ふ心の至つて純な子供が、その後出家して既に廿五歳と爲り、名を唯圓と改めて親鸞の限無き寵愛を一身に集めてゐたが、やがてその唯圓も青春の淋しさを感ずる樣になつて嬶てはある遊女と熱烈な戀に陷り、自はその戀を神聖なものとのみ考へ、法と戀とは決して矛盾するものとは思つてゐなかつたのに、案外にも多くの兄弟子達に反對せられ罵詈せられ沮まれんとして始めて人生の矛盾に逢着し、苦悶に苦悶を重ねた結果師の上人の悟得した教訓に感じて戀の成るも成らぬも一切を佛の力に任せ自力的の煩悶をする事はすべて止めてしまはうとした。そしてどう云ふ風にしてかは明に書いてないが兎に角二人の戀は成就して二人の子迄爲し、嬶て女は尼となつて共々佛門の爲に盡してゐる、その中に親鸞は常に偉大なる聖者の死ぬ時の樣に佛と人生とを讃美しつつ心安く往生すると云ふのが大體の中心の筋で、この唯圓の幼時よりの生活の發展を中心として親鸞上人の信仰生活と慈悲心とを强き伴奏の樣にその影となし表となして鳴り響かせ、更に上人の子であり心も至つて純潔ではあるが心に堪へ切れない思想上の煩悶がある爲めに放埒を極めてゐる爲め今は悲しき勘當の身となつてゐる善鸞と云ふ人の苦悶や、善鸞と上人との間に生じた恩愛の悲痛なるデイレム

マをその中に織り込んで、親子師弟の情愛や人生の苦痛矛盾や他力信仰の無私的な至境や人の心の本來美しいものである事やなどを涙ぐましき迄に描き出したのがこの一篇である。誰か此の作を讀んでそれが血と涙とを以て記されたものでないと言ひうるものがあらうか。そこには恐ろしき迄に作者の苦悶に苦悶を重ねた後、始めて得られた人生觀がくつきりと描き出されてゐる。私はそう云ふ作に對して輕々しく是非を論ずる事が恐ろしい樣な氣さへしてゐる。眞面目に苦しんだ魂の聲ほど尊いものはないからである。恐らく此作は近頃日本に表はれた戲曲中最眞摯なるものとして當然數へらるべき作品であらう。が、倉田氏の此作に於ても（白樺一派の或人々ほどではないが）矢張り曩に現代日本の一部の青年の缺點としてあげた樣な苦惱矛盾はどこ迄も見ることは見るにしても深刻に之を內面から肯定是認したる理を痛感する事なくして徐りに早く永遠の力に陶醉してしまつて樂天觀、攝理觀に急ぎ過てゐる缺點を私は見逃がす事は出來ない。他力の信仰は理を排し下品の智惠を嫌ふと言ふてもそれは決してそんなに單純な信仰ではない筈である。倉田氏自らもこの戲曲中に於て親鸞をして念佛は單純なものだが「內からその心持に分け入れば限りもなく深く複雜なもの」だと言はしめておき乍ら、又、倉田氏はこれだけ眞摯に人生の矛盾と苦惱とを凝視してる人であり乍ら、序詞の終りや左衞門の改心や遊女淺香の諦めた心や唯圓の戀が成就して行く道行などに就てどうしても少し深く立ち入つた見方と描寫とをして攝理の神の眞のみ心をもつと深刻に示し得なかつたのであらうかと私は殘念でならない。若くは此戲曲中に於て最多く私に感動を與へた善鸞の煩悶の樣にすべてに就て作者は根氣よく煩悶すべきではなかつたらうかとも思ふ。そして戲曲の主人公の言行を以て直に作者の理想若しくは人生觀と見做す事の早計な事は固よりであるが、親鸞の信仰をも殆基督教精神に近いものを以て描寫し、作者の主觀を飽く迄も吹き込んである此戲曲に於ては上述の如く論ずるのも恐らく誤ではあるまい。又その事は序詞の內容も之を證明してゐる。

次ぎに技巧の方面に就て言へば、すべて部分々々の科白や人物の出し入れはしつとりとした落付いた懷かしい調子を以て巧に運ばれてゐるが、全體から見る時は內面的な自らなる發展と連絡とを缺いてゐる樣に思はれる。それに恐らく「出家とその弟子」と云ふ題をつけた作者の本意は師と弟子との二人の關係及二人のそれぞれの生活を描くのが本意であつたらうが、その結果としてともすれば主人公が唯圓になつたり親鸞になつたり若しく及二人の關係になつたりしてすべてのものがしつくりと一つに結ばれず、常にその中心が動搖してゐる當然の結果であらう。次に第一幕は一幕物の樣な技巧が用ゐてあつて親鸞と唯圓とが緣を結ぶ外面的の原因及唯圓の心に潛む發願心を僅に力弱く示す外、內面的に將來の多くの幕の發展を暗示し且つ人々をして期待せしめるやうな豐富な萌芽を缺いてゐるのは著しい缺點である。第一幕が何となく次の幕と充分內面的に連絡し切つてゐないやうに思はれるのも恐らくその爲めであらう。それからこれは大した問題ではないが左衞門の妻のお兼が「好意のある表情をして聞いてゐましたよ」と言ふ樣な女學生でも使ひ相な言葉を使つたり、すべてを同行と呼

んで自は「弟子一人も持たず候」と云つた親鸞が頻に弟子と言ふ語を用ゐたり）雜修として親鸞が嫌つた祈りをば屢々行はせたりしてゐるのも耳障りだと云へば云へやう。が、いかなる缺點があるにしても何よりも尊いものは眞面目なる魂の聲である。であるからその眞面目なる魂の聲に充ちたこの作者に對しては私は最早やこの上批評がましく言ふことを避けたいと思ふ。そしてたゞ、輕浮なる作品のみ歡迎せられる今日の日本に於て私はかゝる眞摯なる作者を心を單めて推奬し且つ前途有望なる氏の健在を祈るだけに止めやうと思ふ。（東京市神田區南神保町十六番地岩波書店發行定價一圓）（岡本春彦）

儒家哲學本義

内田　正著

此書は著者の男旭文學士の序文にある如く「儒學大綱」と「儒學精義」とを主要なる部分とし、「儒學が西洋哲學最近の趨勢と其の撰を一にする所以を明にし、儒學の價値を世に知らしむる」ために公にしたものであつて、著者の特に意を注いだ點は「儒學の本領を明にすると共に儒學に於ける致知道體の問題は實に西洋哲學の知識問題、價値問題なること」を高調することである。

今此書の目次を見るに、上卷は儒學大綱であつて人學、道學、心學、理學、儒語字義考の諸章があり、下卷は儒學精義で、致知類、道體類の二つに分れて居る。更に附錄として「儒教主義大發展之趨勢」「朱子學研究序論及題目」を載せてあるが、前言したやうに此書の主要部は前二篇であるから私の紹介も此の二編に限るのは勿論である。先づ儒學大綱より述ぶれば、此の篇は著者自身の考ふる儒學の根本の主張を明にせむとしたものであつて、著者の自序によれば「東西の學問を研究し參互思索し、反覆沈潛し十餘年を經」たる後、得たる所を表明したものである。著者は儒學を人學、道學、心學、理學の四類に分ち、各類に各々本領ありとして古聖の類語を列擧して其の大體を示して居る。人學にて言ふ人とは生物學及社會學に屬するものであつて、或は之を人道論とも言ひ、儒學大綱中の第一類には此の人學のことに就いて述べ、主として人と道、私と公との別に關する儒教の經典の文句を引用してある。第二類は道學又は智仁論であつて、倫理道德を研究するもの、無作用、有作用、仁、義、禮、智、勇、明、誠、聖等に關する經文を列擧してある。著者は道學を今日の主觀道德學に相當するものと言つて居る。第三類は心學又は知行論であつて、無作用と有作用、知と物、我と物、知と意、識と力とに關する經文を掲示して居る。心學は今日の心理學及認識論に相當するもので、道の心的觀であると言つて居る。第四類は理學又は理氣論であつて、形而上と形而下、道と器、性と情、理と物、道と物、性と氣、道と事、理と氣、性と生との別に關する先哲の諸語を掲げて居る。著者は理學を今日の價値哲學及び形而上學に相當するものと言ふ。儒學大綱には此の四類に就いての說明の外に儒語字義考、及有作用と無作用、形而上と形而下の對字一覽表、形而上下分合表、道學と心學、理學との關係圖、規範と自然法則との關係圖、道學範疇圖式、理學範疇圖式とが載せられ、各々簡單な說明が附記されて居る。次の儒學精義に於て特に著しく現はれ居る著者の努力、卽西洋哲學者の所說を以て儒學を說明せむとする努力は